

全祖望と鈔書の精神史

早坂俊廣

(1) はじめに

清代の思想家・全祖望（1705～1755、字は紹衣、号は謝山、浙江寧波の人）の文章を読んでいると、しばしば「鈔」¹（書き写す）という表現を目にする。例えば、「永樂大典から鈔写した」、「天一閣所蔵のものを鈔写した」といった類の表現である。また、これら「鈔」に関わる記述は誇らしげとも感じられる書きぶりであることが多く、「鈔」に対する全祖望の深い思い入れをそこから看取することができる。本論文では、そのような、全祖望における「鈔」という行為の意味を考察したい。

具体的には、彼が「鈔」という行為をどのように語ったのか、また、彼がどのような機会にどのような書籍を「鈔」したのかを確認し、彼における「鈔」という行為の実相を検討していく。中でもとりわけ、先祖親族や同郷の先人たちから彼が引き継いだ「鈔書の精神史」とでも呼ぶべき事柄を摘出していきたい。そのような検討を通して、「書籍の入手が困難だったから」とか「彼が貧乏学者だったから」とかいった一般論には回収できないような、さらには、「書き写す」という行為から連想されやすい「非主体的・没個人的で退屈な作業」といったイメージを裏切るような、彼の「鈔」に対する強い思い、およびそれが彼の学問に占めている意味合いの大きさについても指摘してみたい。

本邦において、全祖望に関する研究はあまりにも少ない。彼はいわゆる「浙東史学」の継承者と目される存在であり²、学術史においては『困学紀聞』『水経注』『宋元学案』に対する整理・増補・校訂・注釈等で名高い³。しかし、そうであるが故に、逆に彼その人に対する研究関心が希薄になっていたのかも知れない。既定の思潮をひきづく立場や、既存のテキストをまとめ、ととのえ、おぎなう、といった作業には「独創性」は感じられず、彼その人をあえて取り上げる意義が見いだしにくい、と言っては言い過ぎであろうか。いずれにせよ、研究状況と彼の名声との格差が著しいことは確かである。だが、現代の我々でさえも、明清交替期の歴史や中国近世思想史を語る際に、彼が残した多くの記録・資料・コメントをしば

¹ 本稿が底本に用いた詹海雲校注本『鮚埼亭集』（鼎文書局）などで、全祖望がおおむね「鈔」字を使用しているためこの字を基本的に使用するが、論考中で「抄」字のものを検討の対象に加えた場合もある。つまり、本稿ではあまり厳密に両字を区別していない。

² 「浙東史学」とグループングすべき学派が実在したか否かについては議論があるが、ここでは触れない。全祖望から見て、黄宗羲や万斯同・万斯大たちが同郷（もしくは隣郷）の先達として存在し、彼らを引き継ぐ者としての自己認識を全祖望が強く抱いていたことは確かであるから、そういう意味合いにおいてはここでのこの表現は許されるであろう。

³ 『宋元学案』に対する増補修訂作業から全祖望の思想史観を摘出した研究に、何俊「宋元儒学の再構築と清初思想史の歴史観—『宋元学案』全氏補本を中心とした考察—」（鈴木弘一郎訳、『中国—社会と文化』第20号、2005年）があり、参考になる。

しばしば利用する。そして、私見によれば、彼が残した多くの記録・資料・コメントは非常に「癖」のあるものである。「癖」という言葉が一般的な物言いに過ぎるのであれば、記録・資料・コメントを書き留めた人の個性が濃厚に表出しているという意味で、「記録特性」と言い換えてもよい。この「癖=記録特性」に、我々も含めた後世の人間はかなり拘束されているのではないだろうか。この実感を確認すべく、本論文は執筆される。彼の「鈔書」に着目する理由もそこにある。

(2-1) 家の教えとしての鈔書

全祖望と「鈔」との関わりについて最も多くのことを語ってくれているのは、彼の「双韭山房蔵書記」である。これは、自らが属する全氏一族の蔵書楼の歴史を記した文章である。冒頭、祖先の「先侍郎公⁴」の有した蔵書の大半が「城西豊氏⁵」のそれを鈔写したものであったことが記される。皇帝より下賜された書籍も多くあったが、子孫の無理解によりこの蔵書、すなわち「阿育王山房蔵本」は散逸してしまう。「先宮詹公⁶」の蔵書も同様の憂き目にあった。一族の蔵書史をこのように振り返った後、全祖望は、以下のような思い出を語り始める。

国難が収まった後、先贈公⁷は山中で学問指導を行い、その授業料で徐々に書物を買いきろえていき、とても手が出ないような書物については、時に手ずから鈔写したりした。亡父⁸と叔父⁹とが幼いころ、先贈公は、字の練習として書物の鈔写をさせた。やがて、私が紙や墨を扱えるようになると、亡父もまた私に書物の鈔写を課した。[亡父は]かつて私に向かって、「書物の鈔写をする者は、能書で名を成すことが絶対できなくなるものだ。我が家も、先侍郎公以来、能書家ばかりであったが、最近になって、書物の鈔写によって急速にそれが廃れてしまった」と語った。いま亡父の遺品を一つ一つ手に取ってみて、その言葉が今でも耳に残っていることをしみじみと実感せざるを得ない。ただ、我が郷土の歴史有る家々は、争乱に遭って書籍が散逸していないところなど無く、范氏の天一閣だけは幸いにも無事である。そういうなかで、我が家は三代に及ぶ文筆生活のおかげで、五万卷の蓄えを再び擁することができたのだから、これもまた幸いと言えよう。〔難定、先贈公授徒山中、稍稍以束脩之入購書、其力未能購者、或手鈔之。先

⁴ 全元立のこと。字は汝徳、号は九山、鄞県の人。全祖望の六世祖。全祖望の一族に関しては、王永建『全祖望評伝』（南京大学出版社、1996年）が特に有益であった。

⁵ 「城西豊氏」は、北宋の宰相・豊稷の流れを汲む寧波を代表する名家であったが、明の豊坊に至って没落した。豊坊（1492～1563）、字は存礼・存叔・人翁、号は南禺外史・道生。偽書捏造マニアであった彼により、寧波を代表する名家であった城西豊氏は崩壊へと至り、そのため豊氏万卷楼の蔵書の多くが天一閣に流れ込んだと全祖望は主張する。豊坊については、平岡武夫「古書の幻想と文字の魅惑—豊坊の古書世学」（『経書の伝統』、岩波書店、1951年、所収）、および東京大学出版会から刊行予定の「東アジア海域に漕ぎだす」シリーズ第二巻『文化都市 寧波』所収の近藤一成氏の論考を参照。

⁶ 全祖望の高王父・全天叙を指す。全天叙、字は伯典。

⁷ 全祖望の祖父・全吾騏を指す。全吾騏（1629～1696）、字は聿青。

⁸ 全祖望の父・全書のこと。全書（1663～1738）、字は吟園。

⁹ 全書の弟・全靄のこと。

君偕仲父之少也，先贈公即以鈔書作字課。已而，予能舉楮墨，先君亦課以鈔書，嘗謂予曰，凡鈔書者，必不能以書名，吾家自侍郎公以來，無不能書，而今以鈔書荒速廢業矣。予至今檢點手澤，未嘗不歎遺言之在耳也。但吾鄉諸世家，遭喪亂後，書籤無不散亡，祇范氏天一閣幸得無恙，而吾家以三世研田之力，得復擁五萬卷之儲胥，其亦幸矣。「雙韭山房藏書記」，『鮎埼亭集』外編卷17 *以下，『鮎埼亭集』からの引用は，内外編の別と巻数のみを記すこととする。]

散逸の憂き目にあった一族の蔵書は，三代におよぶ鈔写の営みによって再び勢いを取り戻すことができたのである。この文章の冒頭で，全元立が城西豊氏から書物を鈔写したことによって一族の蔵書を充実させたことと述べていたことも併せて考えれば，全祖望にとって書物を鈔写することは，家学，一家の学と言ってよいほどの大きな意味をもっていたことが分かるだろう¹⁰。

さて，以上のように，全祖望は自らの鈔書を一族の歩みのなかに位置づけ，一族の蔵書が離合集散を繰り返しながらも，鈔書によってその命脈を保ってきたことを強調するのだが，このような全祖望の「蔵書—鈔書」観が形成されるに当たっては，一族の伝統以外に，黄宗羲と顧炎武という先達の影響も大きくあずかっていたように思われる。たとえば，全祖望自身が著した黄宗羲の伝記のなかで，以下のような黄宗羲の姿が描写されている。

[父君である] 忠端公は逮捕された際，公（黄宗羲）に「学者は，史実をひろく知っておかねばならない。『国朝献徵録』を読むとよい」と仰った。そこで公は，明朝までの十三朝の「実録」と「二十一史」を一心に究明し，その果てに諸経に帰着した。経を修めた後には，ついでに九流百家の学をも研究し，読まない書物は無かった。……家蔵の書物をすっかり読み切った上，足りない書物については鈔写した。〔忠端公之被逮也，謂公曰，學者不可不通知史事，可讀獻徵録。公遂自明十三朝實録上溯二十一史靡不究心，而歸宿於諸經，既治經則旁求之九流百家，於書無所不窺者。……既盡發家藏書讀之，不足則抄之。〕「梨洲先生神道碑文」，内編卷11]

そして，このようにして収集した書物を所蔵すべく，黄宗羲は蔵書楼を建てたのだが，その名を「續抄堂」という。名前の由来は「思承東發之緒」と説明されている（同前）。「東發」とは，南宋末寧波の思想家である黄震（1213～1280）のこと。黄震は，黄宗羲と同族の先人で，その著『黄氏日抄』で有名である¹¹。つまり，「續抄」とは，『黄氏日抄』の著者の精神

¹⁰ 『水経注』研究史における全祖望の功績には，「経」の部分と「注」の部分とを厳密に区分けした点のほか，『水経注』には「注の中にさらに注のある箇所もある」ことを指摘したことがあげられるが，彼はそれを「先司空公（全元立のこと）が最初に発見した」と述べている（『全祖望校〈水経注〉稿本合編』〔中華全国図書館文献縮微復制中心，1996年〕所収の全祖望「水経題辞」）。また，彼の『水経注』研究には，先祖代々の校本も活用されたようである。彼は，「予家自先司空公先宗伯公先贈公三世皆於是書有校本」，つまり先祖である全元立・全天叙・全吾騏がそれぞれ『水経注』の校本を作成していたことを述べている（「贈趙東潛校水経序」，内編卷32）。一族の学問伝統が全祖望にとって大きな意味をもっていたことが分かる。以上の点に関しては，陳橋驛『水経注論叢』（浙江大学出版社，2008年）を参照した。なお，これこそ「注のなかの注」になってしまうのだが，本論文の中国語版（末尾の「付記」を参照）において，全祖望の『水経注』研究に関する説明が不正確であったので，ここに述べたように訂正したい。

¹¹ 黄震については，早坂俊廣「黄震の「浙学」—現実と表象のはざままで—」（『信州大学人文学部人文科学論集〈人間情報学科編〉』第37号，2003年）を参照されたい。

を引き継がんとする黄宗羲の意志を表明した言葉であると理解できよう。全祖望の「先生之藏書、先生之學術所寄也」（「二老閣藏書記」，外編卷17）という黄宗羲論¹²を踏まえてみるならば、この藏書樓の命名は、意外と大きな問題を含んでいるように思われる。そして、全祖望自身が明言していないので推測でしかないが、黄震から黄宗羲へとつながれた系譜を、彼は自ら引き継ごうとしたのではなかろうか。「鈔（抄）」という語を介した、浙東地域における精神的な学脈¹³をここに見出すことができるように思われる。

さて、全祖望に強い影響を与えた思想家ということ言えば、顧炎武の存在も、黄宗羲に劣らぬほど大きいと言える。その顧炎武に「鈔書自序」という文章がある。顧炎武は、この文章の冒頭で「わたし、顧炎武の祖先は、海のほとりに住み、代代儒者であった」と述べ、祖先はみな経書に精通し詩文も作る知識人であったことに触れた後、昔、実の祖父に著述のない理由を養祖父にたずねたときの思い出を語り出す。

養祖父のことばは、「書物を著述するより、書物を筆写する方がよい。すべて現代人の学問は、きっと古人の学問に劣る。現代人が見る書物の範囲は、きっと古人に劣る。そなたははげむがよい。読書するばかりだ」。養祖父の筆法はほぼ唐代の人に近いものがあつた。性質はものにこだわりなく人なみすぐれていた。けれども自分で話されるのに、「わかいときは毎日日課として古い書物数枚を筆写した」ということである。現在散逸したのこりが、なお数十帙あり、それは他の知識人の家には存在しないものである〔先祖曰、著書不如鈔書。凡今人之學，必不及古人也。今人所見之書之博，必不及古人也。小子勉之，惟讀書而已。先祖書法，蓋逼唐人。性豪邁不羣。然自言少時日課鈔古書數紙。今散亡之餘猶數十帙，他學士家所未有也。』¹⁴「鈔書自序」，『亭林詩文集』卷2〕¹⁴

養祖父の訓育は、顧炎武に大きな影響を与えたようである。後に顧炎武は郷里を離れ諸国を放浪することになるが、その際、宿の主人が書物を見せてくれることがあると、「手鈔」したり「人を募って鈔」したりした。また、既に先人が言及していたことを自分の新説と思ひこんで発表してしまったときには、養祖父に背いた気分にあつた。〔養祖父がなくなって二十七年にもなるのに、そのことばは今なお耳にのこっている〔已二十有七年，而言猶在耳〕〕。

彼の耳にとりわけ残っていたであろう「著書不如鈔書」というフレーズは、清代の学者の精神を端的に表している有名な言葉である。これもまた推測の域を出ないものであるけれども、前に引いた「双韭山房藏書記」を全祖望が執筆する際には、顧炎武のこの「鈔書自序」が念頭にあつたのではないだろうか。一族の歩みを振り返り、先祖から受けとった大切な教えとして「鈔書」を語るスタイルは、非常に似通っている。具体的にどの程度このことを全

¹² 二老閣藏書樓と黄宗羲に対する全祖望の見解については、早坂俊廣「場所の記憶／全祖望の記録」（『中国一社会と文化』第27号，2012年）を参照されたい。

¹³ 「書物を鈔する」という点から言えば、明代の楊守陳をこの系譜のなかに加えることができよう。楊守陳（1425～1489）、字は維新、号は鏡川、鄞県の人。「與鄭南谿論明儒學案事目」（外編卷44）で全祖望は『明儒学案』に彼に関する学案を立てるべきことを主張している。その中でも言及されていることだが、楊守陳は、四書五経のすべてについて「私鈔」を作っていた人物である。「城北鏡川書院記」（外編卷16）など、全祖望は郷土の先達として彼をしばしば顕彰した。もちろん、本稿で主に扱っている「鈔」は「かきうつす」意であり、黄震・楊守陳が作成した「鈔」は「ぬきがき」なので、そこを区別する必要も時にはあろう。だが、全体的な点から言えば、ここで述べたような系譜付けは有効であると考えている。

¹⁴ 「鈔書自序」の翻訳・要約は、清水茂『顧炎武集』（朝日新聞社，1974年，pp.201-214）に拠った。

祖望が意識していたのかは定かではないが、両者の間にも、鈔書をめぐる精神的な脈絡のようなものを指摘することはできるだろう。

(2-2) 鈔書の交遊圏

さて、もう一度、全祖望の「双韭山房蔵書記」に戻ってみたい。この文章は、全氏一族の歩みを述べ来たった後、全祖望自身の来歴へと話を展開させている。全氏一族との関係にとどまらず、全祖望当人に於ける鈔書の意義を考えるうえでのキーワードがここには集約的に記されている。

双韭山房もまた先侍郎公の別荘で、大雷山にあったのだが、今はもう無い。先贈公はその名を取って自らの書齋に冠した。私が学業等で外へ出回るようになってから、いろいろな蔵書家のところで書物の鈔写をかなりするようになり、徐々に蔵書も増えていった。そんな折り、翰林院において「永楽大典」数万冊を見ることができ、驚喜して、まだ見たことのない書物を鈔写したいと考えた。我が友の馬嶠谷、趙谷林君はともに資財を拠出して援助してくれたが、私は左遷され翰林院を去ることとなった。〔雙韭山房者、亦先侍郎之別業、在大雷諸峰中、今已摧毀、而先贈公取以顔其齋者也。自予出遊、頗復鈔之諸蔵書家、漸有增益、而於館中見永楽大典萬冊、驚喜、欲於其中鈔所未見之書。吾友馬嶠谷、趙谷林皆許以貲爲助、所鈔僅數種、而予左降出館矣〕

ここでのキーワードとは、「永楽大典」と「吾友馬嶠谷趙谷林」である。「永楽大典」については、節を改めて論じることとし、ここでは「吾が友」たちについて論及しておく。

馬日瑄（1688～1755）、字は秋玉、号は嶠谷。弟の馬日璐（1695～1769?）、字は佩兮、号は半查）とともに「揚州二馬」と呼ばれ、全祖望らの学術文化活動を支援した。揚州を代表する塩商人にして蔵書家であった馬日瑄と馬日璐は、全祖望（および多くの江南の知識人たち）にとって言わばパトロン的な存在であった。それは単に金銭的な援助にとどまるものではなかった¹⁵。彼らの友情がよく分かる文章を以下に引用する。少し長い引用になるが、「著書不如鈔書」ということをご了解いただきたい。

揚州は古来、音楽と色事で有名な地区であり、人々は決して書卷に親しもうとせず、最近特にその風潮が著しい。吾が友である馬嶠谷氏、半查氏兄弟は、その流れに逆らってせき止めようとされている。その居所の南に小玲瓏山館がある。園亭は清浄な美しさをたたえているが、ひときわ高く突き出ているのが叢書楼であり、十万余巻を収蔵している。私は南北を往還する際、ここを通りかかるので、宿泊させてもらう時には必ず書物を借覧する。馬嶠谷氏は時候の挨拶以外では、必ず「最近、未見の書をどれだけ入手したか」「書名だけ聞いて入手できていない書物はどれだけあるか」と質問してくる。私の答えを聞くといつも書名を覚えていて、それを人から借りて鈔写したり他から購入したりして、生涯それをこつこつと続けて、疲れを知らない。珍しい書物を入手すると、必ず出してきて私に見せてくれる。席上には朱碧山の銀器になみなみと酒がつがれ、美

¹⁵ 彼らについては、方盛良『清代揚州徽商与東南地区文学芸術研究一以「揚州二馬」爲中心』（人民文学出版社、2008年）が参考になる。

味しい果実も勤めてくれた。私の鑑定の言葉を得ると、すぐさま向き合って酒杯をあげ合った。私は北京で官となって、詞館で「永樂大典」数万冊を見ることができた際、驚喜して手紙でそのことを告げた。馬半查氏がすぐさまやって来て、写人は何人必要か、費用はいくらかかるかと質問し、盛んに私をけしかけた。私は宋人の周礼関連の書物を鈔写し始めたところで、突然、官を罷免されたが、帰郷の際に立ち寄ると、天一閣に所蔵されている遺籍を鈔写するよう頼んできた。つまり、その書物を愛好することの真剣さはこのようであった。〔揚州、自古以來、所稱聲色歌吹之區、其人不肯親書卷、而近日尤甚。吾友馬氏嶰谷、半查兄弟、橫厲其間。其居之南有小瓊瓏山館、園亭明瑟、而巋然高出者、叢書樓也、迸疊十萬餘卷。予南北往還、道出此間、苟有宿留、未嘗不借其書。而嶰谷相見、寒暄之外、必問近來得未見之書幾何、其有聞而未得者幾何。隨予所答、輒記其目、或借鈔或轉購、窮年兀兀、不以爲疲。其得異書、則必出以示予、席上滿斟碧山朱氏銀槎、侑以佳果、得予論定一語、即浮白相向。方予官於京師、從館中得見永樂大典萬冊、驚喜貽書告之。半查即來、問寫人當得多少、其值若干、從與予甚銳。予甫爲鈔宋人周禮諸種、而遽罷官、歸途過之、則屬予鈔天一閣所藏遺籍、蓋其嗜書之篤如此。……「叢書樓記」、外編卷17〕

まさに「学友」「同好の士」とも呼ぶべきものとして、彼らの交流はあった。全祖望の『困学紀聞』『水経注』『宋元学案』に関する研究も、馬氏との交流抜きにはなし得なかった。馬曰瑄は、書物の収集のみならず校訂にも熱心だった人のようで、「叢書樓記」の後半で、全祖望はその厳格な姿勢を賞賛している。このような同志との交流のなかで、全祖望は書物の鈔写を続けたのである。このことは、「鈔書の精神史」を究明するうえで必ず押さえておくべき事柄であろう。なおこの「叢書樓記」に記されるべくもないが、全祖望は死の間際、自らの文集五十巻を叢書樓に移譲するよう弟子に命じている。葬儀の費用にも事欠く事態に弟子が揚州に使いを派遣したところ、奇しくも、馬曰瑄もまたこの世を去った直後であった。

全祖望がしばしば書物を閲覧させてもらった蔵書樓は、馬氏以外にもあった。故郷・寧波の天一閣は言うまでもない¹⁶が、杭州の蔵書樓の存在も外せない。その中でも特に、「双韭山房蔵書記」で馬曰瑄と並んで「吾友」と称されていた趙谷林¹⁷の小山堂に、全祖望はしばしば立ち寄っている。趙昱（1689～1747）、字は功千、仁和の人、谷林は彼の号である。趙昱の母親が山陰祁氏の縁者¹⁸であったため、世に名だたる祁氏澹生堂の蔵書の多くが趙氏に引き継がれた。彼の小山堂蔵書樓は、「近日浙中聚書之富」の最たるものと全祖望に賞賛された（「小山堂蔵書記」、外編卷17）。また、趙昱の息子である趙一清（1709～1764、字は誠夫、号は東潜）は、父以上の好事家で、変わった書物があると聞くと血相を変えて飛びついたという（同前）。全祖望と密接な交流を行いながら進められた彼の『水経注』研究は、酈

¹⁶ 全祖望に於ける鈔写の意味を考えるに際し、もちろん「天一閣」もまた極めて重要なキーワードである。ただ、天一閣と全祖望の微妙な関係については、前引の「場所の記憶／全祖望の記録」という論文で既に取り上げたので、ここでは論究しない。

¹⁷ 彼には趙信（号は意林）という弟がおり、彼ら兄弟は「二林」と称された。彼らを含めた蔵書家たちの概略を知るには、呉晗『江浙蔵書家史略』（中華書局、1981年）が簡便である。

¹⁸ 「谷林太孺人朱氏、山陰襄敏尙書之曾女孫、而祁氏甥也」（「小山堂蔵書記」、外編卷17）。また、「曠亭記」（外編卷20）も参照。

学に大きな足跡を残している¹⁹。

以上、極めておおまかに全祖望と蔵書家たちとの交流を紹介したが、これだけでも、このような交流が物質的にも精神的にも強く全祖望を支えていたであろうことは看取できる。これは、全祖望に限らないことだが、学者たちの「蔵書—鈔書」ネットワークは、思想文化の形成に無視できない大きな役割を果たしていたのである。

(3-1) 「永樂大典」との出会い

これまで何度か言及したことから分かるように、「永樂大典」との出会いは、全祖望にとってとりわけ画期的な出来事であった。乾隆元年（1736年）、当時三十二歳の全祖望は、進士となって詞館、つまり翰林院に入る。そこで彼は、彼を引き立ててくれた李紱²⁰とともに「永樂大典」を読み、その一部を鈔写する機会に恵まれる。「双韭山房蔵書記」にも「叢書樓記」にも見えている「驚喜」という語が、その時の全祖望の様子を最も端的に物語っているであろう。だが、彼はただ単に驚喜に身を任せたわけではなかった。何と云っても「計二萬二千七百七十七卷、凡例目錄六十卷、冠以御製文序、定爲萬二千冊」という一大叢書である。

そこで、臨川公（李紱）と一緒に〔「永樂大典」の鈔写を〕日課とした。世間に流伝している本から取った部分はすべて捨て置き、近世で失われているものであっても、大義に関わらないものは取らなかった。ただ、見たいと思いつながら手にすることができなかったものだけを鈔写したのだが、大まかな体例で区別して、五つに分けた。〔因與公定爲課、取所流傳於世者、概置之、即近世所無、而不關大義者亦不録。但鈔其所欲見而不可得者、而別其例之次者爲五。……「鈔永樂大典記」、外編卷17〕

ここで言う五つの体例とは、「経」「史」「志乘」「氏族²¹」「芸文」である。この五つを眺めると、それらが、見事なまでに全祖望の学問傾向と一致していることが分かる。ここで、学問傾向と選別原則との先後本末を問うことは無意味であろう。学者・全祖望がこの原則を打ち立て、この原則に則って行われた鈔書がまた学者・全祖望を育てたのである。上述のいくつかの引用から分かるように、全祖望は途中で翰林院を罷免されたため、この鈔書の作業も断念を余儀なくされる。しかし、彼が鈔写した具体的な書名を確認してみると、「学問傾向」という以上に濃厚な、彼自身の志向＝嗜好を読み取ることができる。いま便宜的に董秉純『全謝山年譜』²²で挙げられている書名を列挙すれば、全祖望が実際に鈔写したのは「高氏春秋義宗、荆公周禮新義、曹放齋詩説、劉公是文鈔、唐説齋文鈔、史眞隱尚書周禮論語解、二袁先生文鈔（袁正獻正肅）、永樂寧波府志」となる。先に挙げた五つの体例にもちろんかなっているが、それ以上に強い選択性を感じさせる書名群である。ただ、この点に関する分析は次節にゆずり、ここでは、この「永樂大典」からの書物の鈔写という作業の意義について

¹⁹ 前掲の陳橋駅『水経注論叢』、特にその「趙一清与《水経注》」を参照。

²⁰ 李紱（1675～1750）、字は巨来、号は穆堂、江西臨川の人。彼については、石田和夫『李穆堂』（明德出版社、1992年）に詳しい。

²¹ 「志乘」とは地方志、「氏族」とは宗譜のこと。

²² 詹海雲校注『全祖望《鮑塘亭集》校注』第一冊所収

て確認しておきたい。

ちょうど今上（乾隆帝）が三礼を纂修しようとされていた時機だったので、私は始めて總裁の桐城方公²³に三礼で世に伝わっていないものを鈔写することを訴えたのだが、残念なことに、欠けて失われたものが二千冊ほどにも及んでいた。私は今上に奏上して、宮中の正本を公開し、遺失分を補うことをお願いしようと考えたが、実行には至らなかった。そもそも秘府に儲蔵する書を求めるわけだから、代わる代わる交替するにも往復が厄介で、我々の力では写官を多く雇うこともできないので、みずからこの書に取り組み、毎日、深夜にならないと眠らない生活をしたら、二十巻を終えることができた。付箋をはさんで手分けしたものを四人に鈔写させたが、十日経って終わらないこともあった。これをやり遂げようとするのは簡単なことではない。ただ、埋もれていたこの書を、いきなり人が読めるようにできるならば、作業が完了するかどうかに関わらず、悶悶とした思いをはき出すことはできるだろう。〔會逢今上纂修三禮，予始語總裁桐城方公，鈔其三禮之不傳者，惜乎其闕失幾二千冊。予嘗欲奏之今上，發宮中正本以補足之，而未遂也。夫求儲藏於祕府，更番迭易，往復維艱，而吾輩力不能多畜寫官，自從事於是書，每日夜漏三下而寢，可盡二十卷。而以所簽分令四人鈔之，或至浹旬未畢，則欲卒業於此，非易事也。然以是書之沈屈，忽得人讀之，不必問其卒業與否，要足爲之吐氣。……「鈔永樂大典記」，外編卷17〕

李紱らと協力して行われたとは言え、個人的と言ってもよい作業²⁴には限界があり、また先に述べたような事情でこの作業は中断された。だが、この全祖望と「永樂大典」との出会い、決してその両者の間で閉じられていたわけではなく、「四庫全書」編纂事業以前における特筆すべき活動として後々語り継がれた²⁵。

(3-2) 郷土寧波の學術史と鈔書

さて、前節で予告しておいた、①『高氏春秋義宗』、②『荆公周禮新義』、③『曹放齋詩說』、④『劉公是文鈔』、⑤『唐說齋文鈔』、⑥『史眞隱尙書周禮論語解』、⑦『二袁先生文鈔』、⑧『永樂寧波府志』というラインナップからくみ取れる濃厚な志向＝嗜好とは何だろうか。それは、「永樂大典」から鈔写したこれらの文献のほとんどが、彼の郷土と関係の深いものであった、ということである。まずは、明確にそのことがうかがえる書物から確認していこう。

- ①『高氏春秋義宗』：高元之（字は端叔，鄞県の人）の著。「高氏春秋義宗序」（外編卷23）の中で全祖望は、春秋学の集大成として高元之のこの著を評価し、併せて、『春秋集注』

²³ 方苞（1668～1749）、字は靈阜、号は望溪、安徽桐城の人。

²⁴ もちろん、この鈔写には、前節で言及した全祖望のパトロンたちの意向も反映されていたであろう。また、李紱だけでなく方苞などの先輩学者が身近にいたなかでの作業でもあった。これらの状況を勘案したとき、どこまで「個人的な作業」と言い切ることができるか、軽々には確言できない。後の課題としたい。

²⁵ 「鈔永樂大典記」で述べられていたように、これは、一方で「纂修三禮」の動きが進んでいた時期のことである。これらの間に何か連動性があったのか否かは興味深い問題であるが、これまた後の課題とせざるを得ない。

を著した同族の「高憲敏公息齋²⁶」と彼のことを「吾が郷里では〈春秋二高〉と呼んでいる〔吾郷稱爲春秋二高〕」こと、「高元之の後裔には、明代に陝西撫軍斗樞²⁷がいた。今に至るまでなお読書人の家系として続いている〔端叔之後，在明爲陝西撫軍斗樞，至今猶以讀書世其家〕」ことを記している。

- ③『曹放齋詩說』：「曹放齋詩說序」（外編巻23）の冒頭で、全祖望は「放齋曹先生粹中は、吾が郷 定海の人なり。字は純老，李莊簡公光の壻，宣和六年沈晦榜の進士なり」と紹介する。その後、王応麟（彼も寧波の人）の『詩経』理解との関連でこの書に注目していたこと、「吾が郷の詩学を論ずる者」は曹放齋を「首座」に推さないわけにはいかないこと、等を述べている。
- ④『史眞隱尚書周禮論語解』：史眞隱とは史浩のこと。史浩（1106～1194）、字は直翁。南宋孝宗時の宰相で、後に同じく宰相となった史彌遠の父である。天一閣に所蔵されていた彼の『鄧峰眞隱漫録』を全祖望が鈔写したことが、「鄧峰眞隱漫録題詞」（外編巻24）に記されている。そのなかで「忠定（史浩）は、経学に造詣が深かった。彼の著した『尚書』『周礼』『論語』の注解は、私がすべて「永樂大典」から鈔写したが、完全なものでないのが惜まれる〔忠定深於經學，所著尚書，周禮，論語諸種，予皆從永樂大典中鈔之，而惜其不完也〕」と言及されている点が参考になる。なお、「鄧峰眞隱」とは、史浩が家居していた際の事務室で、月湖の南の竹洲にあった。そこは、明代には、前で触れた全祖望の高王父・全天叙の別荘が置かれ、「吾が家を去ること百歩ならざる耳」（同前）という因縁のある場所であった。全祖望自身がこのような因縁を詳しく述べていることの意味に、私は着目したいのである。
- ⑤『二袁先生文鈔』：南宋期明州（寧波）の出で陸九淵に学んだ楊簡（1141～1226）・舒璘（1136～1199）・袁燮（1144～1224）・沈煥（1139～1191）は「淳熙四先生」と称される。全祖望は彼らを顕彰して止まなかったが、「二袁先生」とは、この四先生の一人である袁燮と、彼の次子・袁甫のことである。「二袁先生文鈔引」（外編巻24）という文章において、「私は「永樂大典」のなかに『二袁集』を見つけ、大いに喜び、読みながら鈔写した。足本の状態まで再現できると思ったものの、全てに目を通す前に、左遷されて都を出るはめになった。……後日、この作業を再開できるのかどうか、定かではない〔予於永樂大典中見二袁集，大喜，隨見即鈔。意謂可得還其足本，而未及徧覽，左降出都，……未知他日尙得輟業焉否也〕」と述べている。
- ⑥『永樂寧波府志』：文字通り郷土寧波について記された書物であるが、そういった一般論に回収できない因縁がこの書と全祖望にはあった。「永樂寧波府志題詞」（外編巻24）で彼は、「吾が郷里の地方志について、宋以後のもので、我が家に所蔵されていないものは無かったが、永樂年間のものだけが欠けていた。「永樂大典」から鈔写して始めてこれを得ることができた〔吾郷志書其爲吾家所藏者，自宋以下無一不備，所少者永樂志耳，及鈔大典始得之〕」と言っている。

以上のことから分かるように、八つの書物のうち五つが直接的に寧波との関係が深い書物であった。さらに、②『荆公周禮新義』、⑤『唐説齋文鈔』に関しても、王安石は寧波の鄞県

²⁶ 高閔（1097～1153）、字は抑崇、号は息齋、諡は憲敏。鄞県の人。

²⁷ 高斗樞（1594～1670）、字は象先、号は玄若、鄞県の人。後出する高宇泰の父。

に知事として赴任したことがあり²⁸、唐仲友は寧波に隣接する台州の人である。全祖望が、狭義の道学的視点にとらわれず王安石や唐仲友に着目した点は、彼の公平な学術的態度を示すものであると言えるが、それに加えて、今述べたような地域的な関心も考慮に入れるべきであろう。全祖望自身が「私は若い頃、唐説齋（仲友）の文章を見たことがなかった。ただ、王深寧（応麟）の『困学紀聞』に引用されている発言を見ると、どれも経世の学に関わるものであった。深寧は朱子に私淑した人であるが、このように（唐仲友に）興味をいただいているのは、昔人にも同じ心があることの証である〔予少時未見説齋之文、但從深寧困學紀聞得其所引之言、皆有關於經世之學。深寧私淑於朱子者也、而津津如此、則已見昔人之有同心〕」（『唐説齋文鈔序』、外編卷24）と述べているように、唐仲友への関心は、寧波の先賢・王応麟によって招来されたものであった。この点は、③『曹放齋詩説』との類似性を想起させ、全祖望における知的関心の発生と展開がどのようなものであったのかがよく分かる事例となっている。

結局、全く寧波との関連性を想起させないものは④『劉公是文鈔』だけだと言ってよい。この書については、「永楽大典」から鈔写する前に、様々な版本があるなか、「後に、臨川侍郎李文穆堂氏の版本を見ると、諸家のものに比べて倍の分量であった。ちょうどその頃、「永楽大典」から先輩たちの遺文を求める機会を得たが、まだ見たことの無い書物が実に多かった。そこで、李侍郎と協力して鈔写し、校訂を加えて二十四巻とした。この書に「文鈔」と命名しているのは、実態に従ったものである〔後得臨川侍郎李文穆堂本、則視諸家倍之、時方從永楽大典求前輩遺文、得所未見者頗多、因與侍郎合鈔、訂爲二十四卷、而命之曰文鈔、從其實也〕」（『公是先生文鈔序』、外編卷24）とあるように、この書に関しては、協力して鈔写した李紱との因縁が強調されている。

以上のような検討の結果、「永楽大典」からの鈔写のなかに、郷土寧波の学術史に対する強い愛着とそれに起因する選択性という、全祖望の濃厚な志向＝嗜好を見いだすことができよう。対象数が少ないだけに強固に主張することはできず、何度か言及した背景的要因が作用しているであろうことにも留意する必要がある。ただ、煩を惜しまず引用した上記の文章のなかで、「わが郷」という言葉が繰り返し出現するところに、このような愛着・敬慕の念を見いだすことは容易である。彼は膨大な量の「永楽大典」の中から、郷土の学術史に関わる文献を優先的に選りすぐって鈔写した。少なくとも、八分の五から八分の七という強い比重をかけて郷土に関わる文献を鈔写したのである。そのような選択性を主に念頭に置いて、私は本論の冒頭で「癖＝記録特性^{くせ}」という言葉を使用した。この表現で私は全祖望を否定したり批判したりするつもりはない。逆に、ここに、彼の学問の根底にある熱意を見いだしたい。この点は、次章における考察においても同様である。

(4) 明清交替期の文献資料と全祖望の鈔書

さて、全祖望における郷土寧波と鈔書の関係に注目して議論を進めてきたが、さらにここに、彼が生きた時代という要素をも含めて考えてみたいと思う。既に言及したとおり、全祖

²⁸ 近藤一成『宋代中國科擧社會の研究』（汲古書院、2009年）第Ⅱ部第2章「鄞縣知事王安石と明州士人社會」を参照。

望は、明末の士大夫、特に反清抵抗運動に従事した人々の文集・史料を精力的に探し求めており、そこには、「歴史を伝え文化を残そうという強い意志」を感じることが出来る。そして、それを「民族意識」などといった大きな物語の中に置くのではなく、具体的な鈔写の現場に立ち戻って考えてみると、〈全祖望という記録特性〉あるいは全祖望の学問の根底にあるものの意味を、より鮮明に理解することが出来るであろう。

まず、『雪交亭集』について取り上げよう。これは、「前武部高公槃菴」、つまり高宇泰（字は元発・虞尊・隱学、号は宮山・槃菴、鄞県の人）の著書である。鄞県高氏については、『高氏春秋義宗』を取り上げた際に既に論及している。「今に至るまでなお読書人の家系として続いている」と全祖望が語っていた高氏のことで、そこで名前が挙げられていた高斗枢は、この高宇泰の父である。高宇泰は、明朝陥落後、寧波の地で兵を起し、魯王から兵部郎を授けられた。「雪交亭」とは、「前閣部の張公鯤淵²⁹の寓亭であり、翁洲³⁰に在った。その左には梅が、右には梨があり、毎年花を咲かせて、枝に連なり葉に接する様は雪のようであった。張公が寿命を終えた時、亭もまた毀された。しかし浙東の亡国知識人たちは、この亭のことを決して忘れはしなかった〔雪交亭者、前閣部張公鯤淵之寓亭、在翁洲、……其左爲梅、其右爲梨、每歲花開、連枝接葉如雪。閣部正命、亭亦圯。而浙東亡國大夫、睠念不置〕」（『雪交亭集序』、外編卷25）。そのような知識人として、この文章では引き続いて黄宗羲と高宇泰が例としてあげられているが、この「雪交亭」は、「浙東亡國大夫」たちにとってのランドマーク、忘却に抵抗して継承し続けていくべき場所の記憶の名称であった。その名称「雪交亭」を冠した高宇泰の著作について、全祖望は以下のような因縁を記している。

雍正六年（1728年）、故国の記録を探し求めていた私は、陸氏の家でこの書を手に入れて、狂喜した。その後、上京して十年が経ち、乾隆三年（1738年）、ようやく高宇泰の孫である高石華氏を招いて、この書物をお見せすることができた。石華氏は遺品に対し厳粛な拝礼を行った後、何度もそれをさすり、はらはらと涙を落とされた。そして、所有する『肘柳集』³¹を鈔写して贈呈するから、この文集を鈔写したものとそれを交換してくれないかとお願ひされた。私は承諾した。しかし石華氏は既に八十歳で、両手はふるえ、家も非常に貧しかったので、写官を雇うこともできず、約束はしたものの、実行には及ばなかった。そうこうしているうちに石華氏は亡くなられ、ご子息は尊父の逝去でこのことにかかずらう暇はなく、そのうえその書を出したがないので、将来『肘柳集』が伝えられるかどうか、今のところ判らない。この文集は、高宇泰氏の慈悲心と忠誠心とが作り上げたものであるから、広く鈔写して伝承しないではよいはずがない。〔雍正戊申、予求故國遺事、從陸氏得之、爲之狂喜。其後奔走京洛者十年、乾隆戊午、乃招武部之孫石華觀之。石華肅拜手澤、摩挲百遍、潸然涕下、因請鈔所有肘柳集見遺、以易鈔此集。予曰、諾。然石華年已八十、兩手不仁、家貧甚、不能蓄寫官、雖有此約、未及踐也。而石華亦卒、其子以大故、無暇及此、又不肯出其書、將來肘柳集之得傳與否、尙未可定、則是集也、武部之婆心碧血所成、其可不廣鈔以傳之哉。同前〕

²⁹ 「前閣部張公鯤淵」とは、張肯堂のこと。字は載寧、号は鯤淵、松江華亭の人。舟山の魯王に従ったが、永曆五年（順治八年、1651年）に戦死した。

³⁰ 翁洲は、現在の浙江省舟山市。当時の反清抵抗運動の一大拠点であった。

³¹ これもまた高宇泰の著作である。

具体的な鈔写の現場がうかがえる文章である。書物が残り伝わるとはということなのかを教えてください。この文章は、「鈔書の精神史」を考える上で欠かすことができない重みをもつ。この箇所が続いて、全祖望は、「嗚呼、故国の喬木³²は日に日に衰微していき、遺こされた文献もこれとともに剥落していく。文献で証拠立てようとしても、どこですればよいというのか。これが、私が溜め息を重ね長く歎いて、それを止めることができない理由である。〔武部之大節、讀是集者、如將遇之、顧所紀止於癸巳、其後如滇中死事諸公、海上從亡諸公尙多。武部卒於康熙初年、當必有續集、而今不可得見矣。嗚呼、故國喬木、日以陵夷、而遺文與之俱剥落、徵文徵獻、將於何所。此予之所以累唏長歎、而不能自已也〕」と嘆じている。一つの王朝が崩壊し、それを伝える文献資料もどんどん失われていく状況に対する焦りが感じられよう。「永樂大典」に関する箇所では「驚喜」「喜」という文字が見えていたが、ここでは、「涕」と「累唏長歎」である。どちらもまた、全祖望にとって鈔写という営みが決して無味乾燥なものではなく、逆に、心を強く揺り動かすものであったことをしっかりと示している。そして、それは、所与の前提として「民族意識」なるものがあったというよりは、身近に接する「浙東亡國大夫」たちの記憶と記録によって揺り動かされたものだと言ってよいだろう。陸氏の家で高氏の著作を手に入れ、高氏の子孫にそれを見せる……といった一連の記述のなかに、全祖望にとって寧波もしくは浙東という場所がもつ意味の大きさをまざまざと見て取ることができるだろう。

このことを確認するために、「穉山先生殘集序」（外編卷24）という文章を、次に取り上げてみたい。そこには、まず、穉山先生こと呉鐘巒³³なる人物の遺集を万泰³⁴が手ずから鈔写していたこと、その書物を万斯大³⁵の息子である万経³⁶に鈔写させてもらう約束を全祖望がしていたこと、それにも関わらずそれを実現する前に火災でその書物が焼けてしまったこと、呉鐘巒の別の書物を鈔写させてもらう約束を、今度は万斯同³⁷の息子と交わしていたのにそれも実現できそうにないこと、呉鐘巒のような忠義の士の文集が伝わらないのは自分の罪であること、が述べられている。そして、議論は以下のように進んでいく。

いま私の家には、先生の詩文集一卷がある。これは高隱君辰四³⁸（高斗樞）の物で、祖父（全吾騏）が入手した。さらに『歲寒松柏録』一卷がある。これは陸隱君春明³⁹（陸宇燦）の物で、父（全書）が入手した。私はこれらを合して二巻とし、序文を書いて、『穉山先生殘集』と題を付けた。ああ、これは、僅かに残った『広陵散』（響きの絶えた琴曲）であり、たとえ断片的な曲、片言隻語であったとしても、どれも愛好の念、敬慕の念をかき立てることができる。序文が完成したら、錢濬恭君に副本一部を鈔写させよ

³² 「故国の喬木」とは、『孟子』梁惠王下篇に「所謂故國者、非謂有喬木之謂也、有世臣之謂也」とあるのを踏まえている。

³³ 呉鐘巒（1577～1651）、字は巒樞、号は霞舟、江蘇武進の人。

³⁴ 万泰（1598～1657）、字は履安、号は梅菴。

³⁵ 万斯大（1633～1683）、字は充宗、号は跛翁。万泰の第六子。

³⁶ 万経（1659～1741）、字は授一、号は九沙、小跛翁。万斯大の子。

³⁷ 万斯同（1638～1702）、字は季野、号は石園。万泰の第八子。彼ら「濠梁万氏」は寧波の望族。早坂俊廣「寧波における知の営みとその伝統」（『信大史学』第33号、2008年）を参照されたい。

³⁸ 高斗樞、字は辰四。前出の高斗樞の弟。

³⁹ 陸宇燦、字は春明。

う。澹恭君の父上である太保公⁴⁰は、先生の門下生でありながら先生よりも先に殉死された方である。先生が著録された『文史』には、太保公の作品が最も多く収められている。どれも皆、いまや錢氏に無いものである。澹恭がこの文集を鈔写したら、このすすり泣きを共にしてくれるはずである。〔今予家尙有先生詩文集一卷、乃高隱君辰四物、而先贈公得之者。又有歲寒松柏錄一卷、乃陸隱君春明物、而先子得之者。予乃合爲二卷序之、而題曰穉山先生殘集。嗚呼、此廣陵散之僅存者、即令斷曲單詞、皆可起愛而起敬也。序成、令錢君澹恭鈔一副本、澹恭之尊公太保、乃先生門下而先殉者、先生所録文史、其收太保之作最多。皆今錢氏所無也。澹恭鈔此集、其應同此歎歎也已〕

この文章にも、万氏・高氏・陸氏・錢氏など、寧波の名家の人々との具体的な交流のなかで書物の鈔写が行われていたこと、鈔書の営みが「すすり泣き（歎歎）」をもたらすものであることが述べられている。全祖望とすすり泣きを共にするのは、錢澹恭であろうか。おそらく彼だけではあるまい。そこには、彼の父親・錢肅樂や呉鐘巒当人も含まれているのではなからうか。なぜならば、呉鐘巒にしてみれば自らの作品が後世に引き継がれるわけであるし、錢肅樂にしてみれば師の作品を我が子が鈔写するわけであるのだから⁴¹。ここでは、鈔写を通して人と人、過去と現在（と、願わくば未来と）が結びつけられている。このように、全祖望にとって書物の鈔写は、単なる資料の書き写しにとどまるものではなく、今は亡き先人を含んだ、様々な人々との魂の交感とでも呼ぶべき作業としてそれがあったのである。それは、一面では、歴史を伝え文化を残そうとする強い意志によって行われているとともに、一面では、「涙」や「溜め息」、「すすり泣き」をも交えたものであった。失われつつあった歴史の痕跡を書き継ぐのは大いなる喜びであるが、その書き継ぐという作業の外部では、それとは比べものにならないほど多くのものが失われてしまっているということも、全祖望は知っていた。彼を鈔写にかき立てたものは、おそらく、忘却と喪失に抗しようとしたささやかな意思であって、そこに「民族意識」などといった大きな物語をいきなり読み込もうとするのは当を失っているように思われる。

(5) おわりに

今さら申すまでもなく、全祖望はきわめて実証的な態度で学問に取り組んだ人物である。文献による実証を厳密に行うことこそ、彼が追求し続けたことである。しかし、そのような彼の知の営みの根底には、非常に強い思いがあった。本論文は、「鈔書」という行為に即して、そのことを確認してみた。まず、全祖望にとって「鈔書」は、一族の伝統や黄宗羲・顧炎武といった先達から引き継いだ、非常に〈根幹的〉な行為であった。それは、彼の学問を

⁴⁰ 「太保公」とは、錢肅樂（1606～1648、字は虞孫・希声、鄞県の人）のこと。彼は、抗清抵抗運動の「民族英雄」として有名である。なお、彼のみならず、この時期の浙東における抗清抵抗運動については、小野和子「浙東のレジスタンス」（同氏編『明末清初の社會と文化』所収、京都大学人文科学研究所、1996年）に詳しい。

⁴¹ 野暮な補足を一つしておくならば、本来、江蘇武進の人・呉鐘巒の書物の話であったものが、途中から寧波の名家たちとの交流に話の重点が移り、最終的には、寧波の英雄・錢肅樂が話の主人公になって終わっているところは、いかにも寧波好きの全祖望らしいところである。

根幹で支える行為だったと言える。また、全祖望は「鈔書」を行う際、非常に〈選択的〉にそれを行なった。彼は、自らが愛して已まない郷土・寧波に関わる文献資料を選びすぐって鈔写した。「永樂大典」を鈔写した時もそうだったし、明清交替期の文献資料を収集・鈔写する時もそうだった。寧波出身者ではない人の学問や文集について語る時にも、つつい寧波の話の主軸にしてしまうほど、彼は郷土愛に満ちあふれていた。そして、全祖望にとって「鈔書」は、時に歓喜を、時に悲哀をもたらす、きわめて〈情感的〉な営みであった。郷土における、具体的で親密な、様々な人々との交流がそれをさらにかき立てたことであろう。

冒頭で述べたように、「書物を書き写す」というと、「非主体的・没个性的で退屈な作業」というイメージがつきまといがちだが、全祖望にとっては全くそうでなかった。このことを確認することは、全祖望の学問を理解する上できわめて有意義なことである。さらに言えば、我々を含む後世の人間が中国の歴史を理解したり学術思想史を構築したりする際に、全祖望がどれだけ大きな影響をそこに与えてきたか、いまも与えているかという点を考えれば、〈実証的〉な彼の学問の〈根幹〉に潜む、〈選択的〉で〈情感的〉な意志を確認しておくことの意味は大きい。それは、例えば、現代の我々が中国思想史をどのように構築するのか、あるいは、中国の思想文化をどう受け止めていくのか、というような、さらに大きな問題へと歩みを進める際に、貴重なヒントを与えてくれるように思われる。本論文が、そういう大きな問題を考える上での一歩になることを願っている。

〔付記〕

本論文は、早坂俊広「全祖望与鈔書的精神史」（『儒学天地』2012年第1期）の日本語版であり、（昨今なにかと猛威を振っている）「業績評価」という点で言えば、同一の業績としてカウントされるべきものである。ただし、講演原稿をもとに作成された（翻訳していただいた）中国語版に比して、日本語版は、中国語版にはない話題や先行研究の紹介が多く含まれる等、分量がかなり豊富で、構成も一部異なっており、また、引用資料に日本語訳を付しているのも、学術的な観点から言えば、独自の存在意義を有しているものであると信じている。

本論文は、2010年度～2013年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「清朝中期以降の寧波における文化保存の精神史」（代表：早坂）による成果の一部である。ただし、その着想においては、2005年度～2009年度科学研究費補助金・特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生」（代表：小島毅）内の計画研究「寧波における知の営みとその伝統一学脈・宗族・トポフィリアー」（代表：早坂）に拠る共同研究から大きな刺激を受けたことは特に付記しておきたい。また、論文執筆に先立ち、日本中国学会第六十二回大会（広島大学文学部、2010年10月10日）において、趣旨を同じくする発表を行った。発表時に司会を務めてくださった濱口富士雄先生とコメントをお寄せくださった木下鉄矢先生にこの場を借りて御礼申し上げたい。さらに言えば、中国語版は、2011年12月9日に復旦大学で行った学術講演がもとになっている。講演の機会を与えてくださった復旦大学の呉震先生、丁寧な翻訳を作成してくださった杭州師範大学の申緒璐先生、論文の掲載に際してご尽力くださった浙江省社会科

学院の銭明先生にも心より御礼申し上げたい。

(2012年10月30日受理, 12月4日掲載承認)

